

おはなしして子ちゃんのこと



藤野可織

心斎橋にリズールというバーがあって、そこでは月に一度、作家を招いてイベントをやっている。だいたい作品の朗読のち、店主の玄月さんとお話をする、という流れであるようだ。

昨年の5月に、そのイベントに出していただいた。朗読時間は30分ほど、と玄月さんから説明があった。しかも、その時間内に完了する短篇が望ましいとのことだった。私は身の回りに積んでいる本のなかから適当な一冊を取り、タイマーをかけて音読してみた。その結果、30分の朗読に要する枚数は、ほぼ30枚であることがわかった。私はそれまで、そのくらいの長さのものはほんの2〜3篇しか発表したことがなかった。

「未発表の短篇を朗読したらどうや」と、玄月さんがにこにこして言った。

「ああ、はい」と私は答えた。原稿料をもらうようになってから、文芸誌などの依頼を受けて書く以外に、小説を書くことはなくなっていた。手元にある未発表の原稿はどれも短篇ではなかったし、一応、行く先が決まっていた。私は新しい短篇を書くことにした。そ

れが「おはなしして子ちゃん」だ。

「おはなしして子ちゃん」という言葉は、以前から私のノートにあった。いつかタイトルに使用おうと書いておいたのだ。一度だけ口にしてそのまま消える小説に、このタイトルはふさわしいと思った。

私は、音読を念頭に置き、一人称で語りかける形式をとることにした。語りかける相手は、とくに想定していなかった。けれど、書いているうちに、ほかを書いているときは異なった快感が湧いて来るのがわかった。

「おはなしして子ちゃん」は、しぜんと小学生のいじめにまつわる話になっていった。私は小学生のころにいじめられたことがある。その、ほんの一時期の経験があとまで尾を引き、私は幾度も対人関係でしくじった。書きながら、はじめて自分のために書いているのだと強く意識した。私は「おはなしして子ちゃん」を、いじめられて無表情になっている子どもころの私を相手に書いているのかもしれない。それまでだって私はずっと自分のために小説を書いて来たはずだったけど、こんなふうな意味合いで「自分のた

め」であったことは一度もなかった。私はいつもは、自分の小説に入れ込まないよう気を付けている。ひとつの小説に登場する人物たちのなかにとくに偏愛する者はいないし、それどころかどの人物もそんなに好きではない。私は記録者であり、小説のなかのものととはかかわりがないのだというふりをして書いている。だから、「おはなしして子ちゃん」を書いてあるあいだじゅう感じていた快感は、本来なら私が自分に禁じていた快感だったのだと思う。主人公をいじめる側に置いたのが、ぎりぎりの抵抗だった。

しかし、なかなか仕上がらないという点においては、「おはなしして子ちゃん」は私のほかのあらゆる小説とびったり同じだった。私は当日の朝になってもまだ書いていた。昼前になって、ようやく完成した。イベントは16時からで、私は15時にはリズールに着いていなければならなかった。そこから誤字を見直し、印刷し、シャワーを浴びて身だしなみを最低限整えると、到着は15時50分になってしまった。お客さんたちは、もう大方席についていた。そのなかに、玄月さんと親交のある講談社の編集者さんがいらしていた。「おはなしして子ちゃん」は、群像に掲載されることになった。消

えるものとして書いたのに、掲載を打診されるとそんな考えは吹っ飛んだ。私は大喜びで承諾し、掲載誌を眺めるころになって、そういえばそんなことを考えて書いたんだったなあ満足しつつ思い出した。そのあたりから、短篇の依頼が増えた。群像では今年のはじめに1篇を書き、数ヶ月のち一気に8篇を書いた。他誌でも4篇書いた。

私は締切に追われ、必死で、けれど夢中で書いた。私はまた、もとのとおり、生活のため、自分に唯一残った物書きの可能性に賭けるために書いた。私に限って言えば、このやりかたが正しいと思っている。

「おはなしして子ちゃん」はこのたび短篇集の表題作となった。でも、あのころの小さかった私にこの小説を話して聞かせたいとは思わない。聞かせてもいいけれど、どうせあの子の耳には入らないだろう。おとなになったらなにもかも仕事の原材料になるんだよ、とささやけば、多少は届くかもしれない。あるいは、おまえも小説の原材料でしかないんだよと教えてやれば、もっと印象に残るんじゃないかなとも思う。

(ふじの・かおり 作家)